

Happy Heart Day

私の友達のVさんが、ボストン市で弁護士として務めている、ある男性に去年からべた惚れしていました。会いたい気持ちが募る中、やっとその日が実現できて、その男性がボストンからワシントンまでアムトラック列車に乗り、Vさんに逢いにくることになりました。2月14日のことでした。

デートは、その男性が予約してくれた高級なベルギー・レストランでの夕食。彼女は素敵な紫色のドレスを着て、店へ行きました。

レストランに着き、テーブルに案内された彼女がそこで見たものは、テーブルの上に置かれた彼女への伝言でした。「もはやできないよ、君に嘘をつき続けることは。私には好きな人がいるんだ。ごめんなさい。」

この残酷な文章を読んだVさんは泣きだしました。

彼女が知らないうちに、見たことのない男性が彼女のテーブルの隣りに立っていました。「こんな日にそんな顔？ そんな涙？ 僕は今仕事が済んだから、とりあえずここに座りましょう。とりあえずね」と言いました。

あれから1ヶ月も経っていないのに、その二人はかなり豪勢に恋に落ちているらしいで



す。Vさんの話を聴いてから、羨ましい気持ちを秘めた自分の心の内の烈しい波を、狼狽しながら認めざるをえません。

日本と異なり、アメリカには、「好き」という感情を誰もが素直に表現できる日はバレンタイン・デーしかありません。毎年2月14日に、好きな人を喜ばせようとアメリカ人は色々と準備します。アメリカでは、その企みをするのは、一般的に男性の方です。もちろん、自由の国アメリカでは、女性が男性を「攻撃」することもあります、明らかにそれは例外です。

未だ付き合いを始めていないような二人、あるいは彼女に興味を持っている気配を自在に表現する勇気を身につけていない男性には、2月14日が告白のきっかけになる可能性が高いです。

自分の幼年時代にはこんなことがあり、今も懐かしく思い出します。6歳ぐらいだった私はジョージアちゃんに熱を上げていたのです。ジョージアちゃんは6歳の卑屈な赤毛(私のこと)に興味を持っていないのを知っていたにもかかわらず、「心のための日」で

あるバレンタイン・デーに私はちゃんとバレンタイン・デーの儀式をこなすことを心にきめていました。6歳の少年ですので、空気を読まない「ケーワイ」を許してもらうしかないでしょう。少し手を震わせながら、お母さんが準備してくれた小さなカードをジョージアちゃんに渡したら、…完全無視。がーあああん！

まあ、ポジティブに考えれば、少なくとも私はバレンタイン・デーの儀式をこなして、少し成長ができたのです。そうっておきます。

私にとっては、日本の習慣の方がいいです。恋心を表現するのに、1つだけじゃなくて、クリスマスを加えて2つの日が備えられています。

その上、バレンタイン・デーの2月14日きたら、日本では女性側が責任を持ちます。反応はどうなるか分からないけれど好きだから勇気を持ってプレゼントをあげてみようか、それとも止めておこうか、などと男性は考える必要がありません。男である私には、その方が遥かに楽に感じます。日本のように、バレンタイン・デーに興味を見せてくれた女性に1ヵ月後にプレゼントを返すことで、不安にならずに済ませたいです。

ところで、日本のバレンタイン・デーのシステムで、アメリカ人である私に解りにくいところがあります。バレンタイン・デーにチョコをもらったときに、それはただの義理チョコかどうかをどうして解読すればいいのでしょうか？ 女性がチョコをくれる時の視線や言葉の抑揚から読み取ることなのか？ しかし、こっそりと机の上に置いておいた女性については、仕草が見えませんかからどうして謎解きをすることができるのでしょうか？

もう一つの解り難いことですが、バレンタイン・デーに、ある女性が何もくれなくても、ホワイト・デーにその女性に何かをあげてもよいのでしょうか？ これができなけれ



ば、男性側から意思表示をするチャンスがありません！

バレンタイン・デーは、自殺率が高いと言われていています。クリスマスもお正月もそうらしいです。人が祝えるようにとつくられている毎年の祝日は、祝えない人たちにとっては苦痛を際立たせるののかもしれない。私の友達の精神科医は、クリスマスやバレンタインの時期に患者が確かに増えると言っていました。恋人がいない人には「自分に無いもの」が目立つからでしょうか。私も「隣りの芝生」を蒼く見る心理から逃れられず、できれば「隣りの芝生」が乾いた茶色に見えたら良いのと思う時があります。あるいは、「自分に有るもの」を「隣りの芝生」として考えることができたなら、素晴らしい輝きに富む毎日を過ごせるでしょう。そう思える術を探しながら今年も頑張ります。

筆者紹介

ネルソン・グラム

U.S. Attorney (Virginia Bar), Global IP Counselors, LLP 所属。

1981年米国バージニア州生まれ。ジョージ・ワシントン大学 (DC) で国際関係論を学びながら、ウルグアイ大使館でインターン。卒業後、2003年渡日、香川県三野町 (現在三豊市) の国際交流協会にて一年勤務。うどんが大好物となる。帰国後、ジョージ・メソン大学ロースクール卒。2008年8月からGlobal IP Counselors, LLPに弁護士として勤務。趣味は読書、運動。好きな言葉は「鳴かぬ鶯が身を焦がす」。